

語りの分際（下）－後シテの語りと比較して－

著者	西村 聡
著者別表示	NISHIMURA Satoshi
雑誌名	金沢大学歴史言語文化学系論集. 言語・文学篇
号	12
ページ	1-14
発行年	2020-03-30
URL	http://doi.org/10.24517/00058208



アイの語りの方際(下)

―後シテの語りと比較して―

西村 聡

はじめに

本稿は本誌前号掲載の「アイの語りの方際(上)―前シテの語りと比較して―」(以下「前稿」と略称)の続編として発表するものである。前稿では日本古典文学大系『謡曲集』上・下(岩波書店、一九六〇年二月・一九六三年二月。以下『大系』と略称)に梗概が記載されている貞享松井本の間狂言について、その梗概が

【A】アイは前シテの話とほぼ同様に物語る。

【B】アイは後場で物語られるのとほぼ同様に物語る。

【C】アイはワキの質問に答えて次のように物語る。

の三類型に整理できることから、まず【A】の型について該当する七作品の分析を行い、アイの物語が前シテの物語とむしろ異なることを明らかにした。そして、アイが前シテの物語を再説しながら両者の水準が異なることの意味を、後シテがアイの代表する通俗的説明の流布を不本意として、自ら本来の姿で物語の核心を再現すると

いう夢幻能の構造に見いだした。その論旨からすれば、【B】の型のようにアイが後シテに先行して「ほぼ同様に物語る」ことはあり得ず、アイはアイの語りの方際を守り、後シテの物語の水準に及ばないはずである。つまり、【A】の型の作品も【B】の型の作品も、アイがシテの物語と「ほぼ同様に物語る」と解しては、夢幻能の構造を読み誤ることになる。本稿では、アイの語りの梗概が【B】の型に要約される〈忠度〉と〈実盛〉を例にこの主張の妥当性を再確認し、アイの語りの役割から夢幻能の本質をとらえ直してみたい。当然、各作品の読み方もこれまでとは変える必要がある。

なお、【B】の型に属する作品は〈忠度〉〈実盛〉の二曲に限られる。そこで、従来「再説」機能を担うとされてきた【A】の型、【B】の型に属する作品の考察に加えて、種々の「補足」機能を担うとされる【C】の型に属する作品についても取り上げたいところであるが、それらは作品の数が多く本稿に収まり切らないことや、〈忠度〉〈実盛〉をやや詳細に論じたいことにより、別に考察の機会を得る

つもりでいる。

一 〈忠度〉のアイは戦況の全体を語り、辞世の歌に言及しない

前述のとおり、『大系』収載諸作品において、アイの語りの梗概が【B】の型に要約される作品は〈忠度〉〈実盛〉の二曲である。まず〈忠度〉の『大系』各曲解題・構成欄は、

4 シテの中入Ⅱ花の宿りをすすめ、名を暗示して花の蔭に消える。／5 アイの物語Ⅱ忠度の事績。／7 後ジテの登場Ⅱ読み人知らずとされたことへの妄執。8 シテの物語Ⅱ出陣の際俊成に歌を託したこと。／9 シテの物語の続きⅡ戦死前後の模様、最後に花のもとに消えて行く。

という記載になっている。『大系』は「5 アイの物語」中の「語り」の部分の貞享松井本の梗概を、

：ワキの質問に答えて次のように物語る。(一)薩摩の守忠度は文武ともに勝れた大将だった。平家都落ちの際には、俊成卿を訪れて和歌数首を託したので、その一首が千載集に収められたが、朝敵の身なので読み人知らずと記された。(二)また一の谷では、忠度は西の手の大将だったが、二月七日の暁に、義経の手勢三千余騎に裏山の鶴越から攻め込まれ、平家方は散々の敗戦となつたので、忠度も雑兵たちにまぎれて落ちのびるところを、岡部の六弥太に呼びとめられ、武勇のほどを示した末首を討たれたのだった。アイは、このように後場で物語られるのとはほぼ同

様の内容を物語つた末、

と要約している(一)。(忠度)全体は、『大系』各曲解題・素材欄に、(一) 忠度の歌が「読み人知らず」として千載集に入れられたこと(平家物語・源平盛衰記)／(二)忠度の戦死の様子(同書)／(三)「行き暮れて」の歌(同書)

と記載する三つの素材で構成されるが、貞享松井本のアイ(津の国須磨の浦に住む者)の語りは、右の引用に挿入した(一)と(二)とを利用し、(三)を利用していいことになる。ただし、『大系』の要約は、(一)の後に若木の桜の所在をワキ(旅の僧)に示し、いわれに諸説あることに言及する部分を省略している。

そこで、(1)〈貞享松井本の本文と梗概〉について、これら三つの〈忠度〉の素材の内、貞享松井本のアイが語る(一)を私に要約すると、薩摩守忠度は文武二道に勝れ、世間に広く知られた立派な大将であった。この一の谷へ下向する折であったが、五条の三位俊成卿に千載集への入集を嘆願し、俊成が勅勘の身では実現しないと答えても諦めず、下向の途中山崎から馬を引き返して俊成宅を訪れ、書き立てた歌どもを託して行つた。そこで俊成は千載集を撰進した時、忠度の歌を一首入れたが、作者の名を付けることはしなかった。

となり、忠度が俊成に託した歌の数(二重線部)を、貞享松井本が明示しないにもかかわらず、『大系』が「和歌数首」と言い換えた理由は不明である。この点、『平家物語』巻第七「忠度都落」では秀歌百余首を書き集めた巻物を託したとしている(以下、本稿では『平

家物語』本文の引用・要約は日本古典文学大系『平家物語』下による。

次に、貞享松井本のアイの語りでは、私に要約した二カ所の波線部が、同じ内容を繰り返す表現である（嘆願は一度）とも、山崎から引き返す行動を取る前にも嘆願して拒まれたことがある（嘆願は二度）とも、両様に読めるところを、『大系』は『平家物語』に即して嘆願を一度とする形に整理している。

貞享松井本のアイが語る〔二〕については、『大系』の要約を読む限りでは、前半の源義経の奇襲による平家の敗走が詳しく、後半の忠度の最期は「武勇のほどを示した末首を討たれた」ぐらいに略述されている印象を受ける。しかし、実際には前半と後半の語りの分量はほぼ同じであり、後半の内容を私に要約すれば、

…忠度はすぐに引き返して六弥太と組み、押さえ込んで討とうとしたところ、敵の郎等が加勢して二人で忠度を討った。敵も味方もこれを見て立派な大将の討ち死にを悼み、涙を流した。

となる。アイとしては一の谷の合戦の全体を語ることから始める必要があり、義経の率いる三千余騎の鬨の聲が数万騎の聲に聞こえたとするあたりは、『平家物語』巻第九「忠度最期」より前の「坂落」を踏まえるなど、忠度が立派な大将であるにもかかわらず敗走する原因を分かりやすく解説している。

前に引用したとおり、『大系』は貞享松井本のアイの語りを「後場で物語られるのとはほぼ同様の内容」と要約するが、〔二〕についての後シテ（忠度の霊）の語りは、一の谷の合戦の全体（〔二〕の前半）に及ばず、自身の「忠度最期」（〔二〕の後半）に集中する。アイの語りと後シ

テの語りは「ほぼ同様の内容」ではなく、前者が全体を語り、後者が自分のことを語るという役割分担が明らかに認められる。『大系』の要約は、結果的にアイの語りが後シテの語りを先取りしない形に見えるにしても、貞享松井本の要約としては〔二〕の前半に偏り過ぎる点と、「ほぼ同様の内容」とする評価を改める必要がある。

二 〈忠度〉のアイは「歌の望み」が足りたとしていない

今度は、(2)〈間狂言の本文と能の本文（忠度）の底本は小宮山元政識語本〉を比較して、シテの語りの領域を侵さないアイの語りの分際を確かめてみる。「5アイの物語」より後に位置する「8シテの物語」の内容は、

「クリ」和歌の家に生まれ、和歌の道を嗜んだこと、これは人間として大切なことである。「サシ」なかでもこの忠度は文武二道^二を継承なさり、世評に名高い人である。後白河院の御代に千載集撰集のことがあり、五条の三位俊成卿が拝命した。「下ゲ哥」年は寿永の秋の頃、平家一門が都を出た時なので、「上ゲ哥」忙しい身であったが、和歌に寄せる心からか、狐川から引き返して俊成の家に行き、自作の歌の入集を嘆願したところ、望みが足りたので、再び武士の務めに戻った。平家一門は西海の波に浮かび、しばらく須磨の浦を頼りとしたが、光源氏ゆかりの土地を平家に不都合と気づけなかったのははかないことである。と要約できる。

まず、傍線部はこの部分のみをワキが謡い、それゆえ忠度に対して「文武二道を受け給ひて」と敬語が使用されている。他はすべて地謡が担当し、全体をシテ（地謡）が語るワキの夢の中で、ワキがシテの語りに同調している。アイの語り（一）の冒頭）はワキが同調するこの世評を踏まえて、語り起こされていることになる。『平家物語』では「忠度最期」の末尾に、六弥太が忠度を討ったという名乗りを聞いて、敵も味方も「武芸にも歌道にも達者」な大將軍の死を惜しんだとするが（と）、忠度自身をシテとする（忠度）では、忠度の自負にかなう評価とはいえ、さすがにワキという他者の口を借りて表明している。

さて、「8シテの物語」は素材（一）の『平家物語』巻第七「忠度都落」を利用してゐる。都落ちする平家一門の隊列を離れて、忠度がどこから引き返し、俊成宅を訪れたかを、『平家物語』は不明とし（3）、〈忠度〉の後シテは自分の行動ゆえに引き返し地点の地名を明示する（八幡市・大山崎町間の淀川の渡し場、狐川）。アイの語りは『平家物語』ではなく、シテの語りにあるこの狐川を念頭に山崎と言ひ換えたと思われる。

一方、忠度が俊成に「歌の望み」を嘆願したことについては、『平家物語』では俊成が嘆願を受け入れ、忠度が喜んで再び馬上の人となったとする。アイの語りの表現では、俊成が勅勘を理由に難色を示し、忠度も確約を得ないまま歌集を置き去りにする。そこでやむを得ず、俊成は忠度の歌を一首、『千載集』に入れ、作者不詳の扱いとした。作者不詳の扱いは事実として動かせないが、『平家物語』の

俊成は忠度の歌集を疎略にしないと応じ、感涙を流して忠度を見送っている。その姿に比べると、アイの語る両者は心が通じ合わず、歌集を託された俊成は困惑したに違いない。アイという第三者の想像力はこのように働くのに対して、後シテは「歌の望み」は足りたと一方的に早合点している。

後シテも『平家物語』の忠度も、生きて入集の恩恵に浴するとは思っていない。それでも忠度が「歌の望み」を嘆くのは、入集を「草の陰にても」喜びたいからであり、『平家物語』、入集を望むこと自体を俊成にとつて無理難題とは考えていない。平家が都落ちする途中の時点では、まだ勅勘の身を憚る意識が薄いことにもよる。後白河院が木曾義仲に平家の追討を命ずるのは、平家の都落ちと入れ替わりに木曾義仲が入京した時であり（巻第八「山門御幸」、平家一門が官職を解かれるのは、さらにその先の太宰府到着の前日である（巻第八「名虎」）。平家滅亡後に現れた後シテは、西海を漂流する平家が暫時の拠点に須磨の浦を選んだ判断を、その時誤りに気づけなかった、はかないことであると悔やんでいるが、忠度個人も入集を望んだ時には、入集しても作者不詳の扱いを受け、勅勘の身の悲しさを思い知る運命を予想していなかった（7「クドキ」）。

入集の希望をかなえ、作者の名前は伏せる、という俊成の苦慮の結果を、後シテはかえって妄執の種とし、その第一としてワキに訴えている。しかし、「妄執の中の第二」とは、『忠度の妄執』としてだれもが想像する、まず最初に挙げるべきことは『程度の意味と取るべきであろう。先行研究においては、『妄執の中の最大のもの』の意

味と取り、入集歌作者不詳の扱いに対する恨みを（忠度）の主題と直結させる読み方も散見する（4）。後シテが俊成の措置を恨み、それが原因で成仏できないと訴えたいなら、ワキではなく、生前の俊成に直接訴えたはずである。後シテが俊成の死後、俊成邸ではなく須磨の浦に出現したのは、『千載集』入集歌（「さざ波や」の歌）の作者を付ける嘆願より、須磨の浦における「忠度最期」を自分で語り、辞世の歌（「行き暮れて」の歌）への関心、評価を呼び起こしたということだろう。俊成の没年は元久元年（一一〇四）であり、「今の定家君」は翌年に撰集終功の竟宴が催される『新古今集』撰集のただ中にいる。この時期にこの場所で、後シテが語る夢物語の核心は「忠度最期」、特に辞世の歌とその作者の発見に認められる。

忠度が生前、俊成に嘆願した「歌の望み」は、忠度の死後、中途半端に実現した。そのため後シテは妄執を抱え込んでいる。しかし、『千載集』撰集の後、今更俊成が忠度の妄執を付度して作者を付けることはあり得ない。「今の定家君」にとつても容易でない、後シテには分かつている。俊成に託した歌集からは一首しか入集せず、しかも作者不詳とされたが、歌集以後に詠んだ辞世の歌は『新古今集』入集の候補作となり得るであろう。もちろん辞世の歌が『新古今集』に入集した事実はなく、『平家物語』諸本においても省略される場合がある（延慶本・四部合戦状本）（5）。省略しない覚一本等語り本系の『平家物語』では、

六弥太の恩賞を省き、忠度追悼の思いを前面に押し出す。六弥太の名誉は、歌によって忠度と判明した後に六弥太がその頸を

太刀に貫いて自身の名乗りをあげる程度に済まされる。その一方で、和歌に反応した人々の忠度への哀惜の涙を記す。十念を唱える忠度の声を背景に、「さざなみや」の歌に呼応する「行き暮れて」の新しい世界が拓かれた。（6）と見なされる。

確かに覚一本の六弥太は大音声をあけて忠度を討つたと名乗るだけであり、その結果、恩賞に忠度知行の地を与えられたとする読み本系諸本と比べて、覚一本は六弥太の武勲譚から忠度追悼に重点を置く形に転換させている。しかし、六弥太の手柄の名乗りを聞き、忠度の討ち死を知った人々とは、戦場にいる敵と味方である。彼らは辞世の歌やその発見の経緯などは聞いていない。大音声をあげる六弥太がその息で詳細を語れるとも思えない。つまり戦場にいる人々は辞世の歌など知らずに、武芸にも歌道にも達者な大將軍を哀惜している。

六弥太は恩賞を望む際に、倒した相手が忠度であることを、『平家物語』のように物語ったであろう。そして忠度の最期と辞世の歌は世上に流布し、ワキも「行き暮れて」の歌の作者が忠度であることは聞き知っている（4「問答」）。それでも、戦場に倒れた忠度の霊が歌句のとおり花の木蔭を宿とするとは、だれも想像できない。せめて俊成ゆかりのワキには辞世の歌を思い起こしてほしいから、前シテは「ある人」の墓標の桜を弔う作法を示してワキの前に現れた（2「サシ」）。前シテはワキの気づきの遅れを「おろか」と評し（3「上ゲ哥」）、4「問答」、失望を隠さない。失望は欲望の裏返

しであると言える。

三 〈忠度〉のアイの語りは後シテの語る余地を残す

後シテの物語るところは、アイの語りとも『平家物語』とも異なる。後シテは世上に流布する物語に満足せず、自分で「忠度最期」の真実を再現することに執着している。後シテの語る「9シテの物語の続き」の内容は、要約すると次のようになる。

「(クリ)」一の谷の合戦で敗れた平家一門は、各々舟に乗り、海上に逃れた。

「(語り)」私も舟に乘ろうとして水際に出たが、後ろから六弥太が六七騎で追い掛けてきた。(私は)望むところと思い、引き返して六弥太と組み、二人は両馬の間に落ちた。(私は)六弥太を押さえ付け、刀に手を掛けたが、

「哥」六弥太の郎等がおん後ろから回り込んで、上におられた忠度の右腕を打ち落とした。忠度は左のお手で六弥太を投げ捨て、今はこれまでとお覚悟なさり、「そこを退きなさい人々よ、西方を拜もう」と言われ、「光明遍照…」とお唱えになったお声が消えない内に、「ア」おいたわしいことに、六弥太は太刀を抜き持ち、お首を打ち落とした。六弥太が心に思うには「イ」おいたわしいことよ。おん死骸を拜見するとまだ年若く、斑紅葉に似た赤地の錦の直垂を着るのは平家の公達のお一人であるろう。お名前が知りたい」と思い、箆を見ると、短冊が付けら

れていた。短冊には「旅宿」を題として、

「上ノ詠」「行き暮れて…」

「哥」という歌と「忠度」の名が書かれていた。疑いもなく、名高い薩摩守であられた。【ウ】おいたわしいことである。

これを覚一本『平家物語』の「忠度最期」及びアイの語りと比較すると、①後シテの語りでは忠度が舟に乘ろうとするが、『平家物語』とアイはそのことに言及しない、②後シテの語りでは忠度の手勢に言及しないが、『平家物語』は勢百騎ほどに守られ、アイは雑兵に紛れて落ちるとする、③後シテの語りでは忠度の着る錦の直垂は赤地、『平家物語』は紺地、アイは錦の直垂に言及しない、④後シテとアイの語りでは六弥太が忠度の名前を問いはしないが、『平家物語』は問いに対して味方であると偽る、⑤後シテの語りとは『平家物語』では忠度が経文を唱えて討たれるとするが、アイは経文を唱えることに言及しない、⑥後シテの語りでは辞世の歌は短冊に書かれているが、『平家物語』は文に書かかれておらず、アイはそもそも辞世の歌に言及しない、⑦後シテの語りでは戦場にいる人々を視野に収めないが、『平家物語』とアイは彼らが忠度の死を惜しむ、などの相違が認められる。

特に⑥については、大蔵虎明本をはじめ、貞享三年刊『間仕舞付』その他の間狂言諸本も同様であり、アイは辞世の歌を知らない(ワキは知っている)か、後シテの語りに委ねたかのどちらかになる。どちらにしても、アイの語りでは不十分であるため、後シテが現れると考えられる。そして、後シテは『平家物語』に代表される世上

の語りにも満足していない。

後シテの語りは一人称で始まり（「語り」）、「哥」からは三人称に転換し、その後半、「六弥太心に思ふやう」以後は六弥太の心中に入り込む。『平家物語』でも、六弥太主従が二人がかりで忠度を討つ場面には忠度のみ敬語を使用し、「忠度最期」の主人公たることを鮮明にするが、後シテの語りは忠度に対する敬意をさらに高めている。その姿勢は、後シテが六弥太の心中に入り込む「哥」の後半に顕著となる。「哥」の前半で敬語の使用頻度を上げるだけでなく、後半では忠度に対する敬語を六弥太にも頻繁に使用させている。加えて、『平家物語』の語り手が表明しなかった心の痛みを、後シテの語りでは三度挿入している。傍線部【ア】は、忠度が経文を唱え終わる間もなく首を討たれるあつけなさに語り手が痛わしさを感じ（⁷）、傍線部【イ・ウ】は、首を討った六弥太までが忠度の死に心を痛めた、すべて後シテである忠度の霊が言葉を添えている。

この「哥」↓「上ノ詠」↓「哥」の全体を、『大系』頭注は、以下、忠度に敬語を使っているのは、ここから（痛はしき）まで）が、忠度自身の物語りとしてではなく、地の文（第三者的立場からの描写）として綴られているため。

と説明する。こうした一連の三小段を「地の文」とする説明は、鑑賞日本古典文学『謡曲・狂言』（角川書店、一九七七年九月）、八寫正治『世阿弥の能と芸論』（三弥井書店、一九八五年一月）所収「世阿弥における修羅の系譜——その演劇的性格に触れて——」、日本の文学古典編『能 能楽論 狂言』（ほるぷ出版、一九八七年七月）などに

も継承され、通説化していると見られる。

本稿では、『平家物語』の語り手が淡々と事の推移を語り、感情移入を控えることに比べて、後シテの語りはむしろ「忠度自身の物語りとして」再構成されていると考える。「哥」の前半で語り手が払うのと同じ敬意を、「哥」の後半で六弥太も払い、共に忠度の死を心底悼んでいる。当時、忠度の辞世の歌の発見者に過ぎなかった六弥太は、後シテがまねて見せると、華やかな戦装束につくづくと目をやり、短冊に書かれた歌を読み上げて感慨にふける。『平家物語』なら六弥太の手柄の名乗りを聞いた人々が大将軍の死を哀惜したところを、後シテは忠度を討った六弥太ひとりに忠度の死を悼む役割を担わせている。

当時、郎等の加勢で形成を逆転した六弥太には行動に余裕がなく、実際は興奮して手柄を名乗るのが精一杯であつたらう。名乗る前には慌ただしく忠度の持ち物を検査して、短冊に書かれた歌の作者名を死骸の主と知る段階がある。『平家物語』諸本でも、中院本などはそこまでしか語らず、『源平盛衰記』も忠度は運の極みに討たれたと批評するにとどめる。戦場の現実において六弥太の役割は忠度を討つことにあり、後シテが身ぶり手まねで再現するような、静かな時間と身を置く六弥太の姿は想像しにくい。つまり、後シテは自分本位に、忠度の死に釣り合う人物として六弥太を描こうとしている。

後シテが再現する自分本位の「私（忠度）の真実」は、このように『平家物語』ともアイの語りともかなり異なる。そして、第三者には第三者の語り方しかできないから、「語られる私（忠度）」と

「私（忠度）の真実」が異なるのは当然のことである。後シテは世上の語りに対して異議を唱え、第三者に「私（忠度）の真実」に即した語り方を求めて、仕方話をしていると考えられる。仮にアイの語る内容が後シテの語りと「ほぼ同じ」であるなら、「私（忠度）の真実」は周知の事実となり、後シテが出現する理由はないとも言える。忠度の霊にしてみれば、俊成の選択に任せた『千載集』入集歌よりも、辞世の歌にこそ万感を込めたつもりであろう。それなのに、辞世の歌の発見に至る忠度最期は十全に語られていない。アイは辞世の歌の存在すら知らないように見える。その意味で、アイの語りは忠度の霊を刺激し、後シテの出現を促す働きをしている。後シテが仕方話をするのは、能が語り物の性格を持つためというより、所作も含めて自分の語り方で物語を定着させたいからであると思われる（8）。

四 〈実盛〉のアイの語りには樋口・手塚の名前が出ない

アイの語りの梗概が【A】の型に要約されるもう一つの作品、〈実盛〉の『大系』各曲解題・構成欄は、

1 アイの独語 || 上人のひとりごとへの疑問。5 アイの物語 || 実盛戦死の模様。 / 9 シテの物語 || 篠原の合戦の話、髪を染めたこと、赤地錦の直垂を着たこと。 / 10 シテの物語の続き || 戦死の模様。

という記載になっている。『大系』は「5 アイの物語」中の「語り」

の部分の貞享松井本の梗概を、

…ワキが質問するので、実盛の出身・最期の様子・木曾殿の首
実盛のさまなどを、後場で物語られるのとはほぼ同様に語る。

と要約している。〈実盛〉全体は、『大系』各曲解題・素材欄に、
(一) 実盛の幽霊が篠原に出た話（口承によるか） / (二) 上人だけ
に見える幽霊の話（時宗関係の伝説らしい） / (三) 実盛最後の晴
れ姿と首洗いの話（平家物語）

と記載する三つの素材で構成されるが、貞享松井本のアイ（加賀の
国篠原の里に住む者）の語りは(三)を利用してのことになる。そこ
で、(1)《貞享松井本の本文と梗概》について、貞享松井本のアイが
語る(三)を私に要約すると、

(一) 実盛は北国方の人であったが、一時源氏方に付いて武蔵
の国長井の庄を賜ったことから長井の斎藤別当実盛と名乗った。
石橋山の合戦以後、上京して平宗盛に仕えた。(二) 篠原の合戦
が始まり、討ち死にを覚悟して宗盛に所望した子細もかなえら
れたので篠原に下向した。(三) 実盛は老武者ながら拵えを華や
かにし、白髪を黒く染めて若武者と見られるようにした。馬に
乗り疾走するさまは諸人の目を驚かせたが、老武者ゆえにくた
びれて、敏捷な敵に首を掻き落とされた。(四) その首級を大将
の見参に入れたところ、木曾殿は由緒ありげな首級であると言
い、実盛の首級であるという意見と、実盛なら白髪のはずであ
るという意見が飛び交った。その頃降った雨で顔が泥に汚れて
いたのを、篠原の池水で濯がせると実盛の首級であることが判

明した。弓取りの嗜みとはこうありたいものと各人が褒めた。となる。貞享松井本の本文にあり、『大系』の梗概に欠けている要素としては、実盛が篠原下向前に討ち死にを覚悟し、宗盛に所望した子細がなかったこと(二二)、が挙げられる。

次に(2)《間狂言の本文と能の本文(実盛)の底本は元盛識語本》を比較すると、能の本文では「9シテの物語」において「木曾殿の首実検のさま」(四)、「実盛の出身」(二二)、宗盛への所望(二二)が、また「10シテの物語の続き」において「最期の様子」(三三)が語られている。まず、「9シテの物語」の内容は、現代語訳に近い形で要約すると、次のようになる。

「語り」篠原の合戦が平家の敗戦で終わって、源氏方では手塚の太郎光盛が木曾殿の御前に参り、「光盛は奇妙なやつと組み討ち首を取りました。大将にしては続く軍勢がなく、平侍にしては錦の直垂を着ています。名乗れと責めても名乗らずに終わりました。声は坂東訛りに聞こえました」と報告した。木曾殿は「それは斎藤別当実盛であろうか。実盛なら白髪のはずが黒く不審である。樋口の二郎は見知つていよう」と樋口を呼び出した。樋口は一目見て涙を流し、「いたわしや(9)、これは斎藤別当であります。実盛はいつも『六十歳を過ぎて戦をするこゝとなる』と、若い人たちと先を争って駆けるのも無分別であるし、老武者と侮られるのも口惜しい。鬢や鬚を墨に染めて、若やいだ姿で討ち死にしたい」と申しました。その言葉どおり髪を染めています。洗わせて御覧なさいませ」と言い終わる

やいなや首を持って御前近くのこの池の岸に臨み、「上ゲ哥」髪や鬚を洗うと墨が流れ落ちて元の白髪となった。「名譽を大切にす弓取りはこうありたいものよ。なんとけなげな」と皆感涙を流した。

「クセ」また実盛が錦の直垂を着るのは自分勝手な望みではない。実盛は都を出た時、宗盛公に「故郷へは錦を着て帰るといふ文句があります。実盛の生国は越前ですが、近年御領を賜り、武蔵の長井に居住していました。今度北国に下向しましたならば、きつと討ち死にいたします。老後の思い出にお許しください」と望んで赤地の錦の直垂を頂戴した。古歌に「紅葉葉を」と詠んだ意味もこの文句による。昔の朱買臣は錦の袂を会稽山に翻し、今の実盛はその名を北国の巷に挙げ、隠れない弓取りの名は末代まで残っている。

これを覚一本『平家物語』の「実盛」及びアイの語りと比較すると、「語り」から「上ゲ哥」にかけての「木曾殿の首実検のさま」(四)に関しては、①後シテの語りでは手塚の報告をほぼ『平家物語』のまま挿入する(「大将かと…」と「侍かと…」の順序を入れ替えてはい)が、アイの語りには手塚の報告の言葉を省略する、②後シテの語りでは木曾が首の主を実盛と推量する時、木曾の幼目が記憶する実盛の髪はすでに半白であったとする『平家物語』の説明を省略し、アイの語りでは樋口の名前を出さない、③『平家物語』ではこれに続く木曾と樋口の応答を、後シテの語りでは木曾の御前で樋口が独語する形に刈り込み、アイの語りでは樋口の名前を出さずに木曾と

御前の人々の問答とする、④実盛が髪を染めたと樋口が知る根拠は生前、その意思を聞かされていたことに求められるが、実盛の用心を『平家物語』の樋口は「思ひ出の詞」（樋口に思い出してもらうために残す言葉）として感心するのに対して、後シテの語りではこれを省略し、アイの語りでは樋口を出さない以上、思い当たる人はいないことになる、⑤『平家物語』の「思ひ出の詞」では討ち死にを覚悟して髪を染めるとまではしないが（六十歳以後の戦陣では髪を染めるぐらいの意思）、後シテの語りでは髪を染めて「若やぎ討ち死にすべき」ことを明言し、アイの語りではアイの伝聞の範囲で推量し、「何とぞ若武者に見ゆる様にと」髪を染めた理由を説明する、⑥実盛の首を洗うのは『平家物語』とアイの語りでは木曾御前のだけか、後シテの語りでは樋口自身とする、⑦『平家物語』では首を洗わせると白髪が現れたとするとどめ、後シテの語りではその場にあった人々が武士の嗜みはこうでありたいと感涙を流したことにし、アイの語りでもこれに従う、などの相違が認められる。

さらに、「クセ」で語られる宗盛への所望（二二）に関しては、⑧『平家物語』の実盛は宗盛に錦の直垂を所望する時、先年、富士川の陣から戦わずして敗走する平家の一員であったことを「老後の恥辱」とし、汚名をそそぐため故郷で討ち死にする覚悟を固めたとするが、後シテの語りでは富士川の恥辱に一切触れず、アイの語りもこれに従う、⑨この場面を『平家物語』では樋口や木曾とは別の語り手が、宗盛方に近侍する者の視点で実盛と宗盛の対面を再現するが、実盛の霊である後シテの語りでは今度の北国の戦を「老後の思

ひ出」にしたいと、討ち死にする未来を飾るために錦の直垂を所望したことにし、アイの語りでは所望がかなったと述べるにとどめる、⑩実盛が錦の直垂を着ることは分不相応な望みと言えるが、『平家物語』の実盛は「故郷へは錦を着て帰れ」という「事の喩」を引き合いにし、後シテの語りでもこれを踏まえた上で「老後の思ひ出」にしたいと宗盛の情に訴え、許しを得たので「私ならぬ望み」であると特に断る、⑪『平家物語』と後シテの語りでは実盛の出身地（越前）、近年の居住地（武蔵の長井）に違いはないが、アイの語りでは石橋山の合戦以来上京して宗盛に仕えたという情報を付け加える、⑫『平家物語』は「事の喩」は朱買臣伝に由来するとし、後シテの語りでは「事」を「本文」と言い換えて、「本文の心」を詠んだ古歌まで添え、アイの語りではこれらにまったく言及しない、⑬朱買臣は出世して故郷に帰り、実盛は錦を着て故郷で討ち死にしたが、『平家物語』では生死の違いを比べて実盛の武名は空しいと悲しみ、後シテの語りでは実盛の武名が未代まで隠れないと誇る、などの相違が認められる。

このように、『平家物語』の語りと後シテの語り、アイの語りを比較すると、後シテの語りには『平家物語』を踏襲する姿勢を示しながら、〈忠度〉の後シテ同様に自分本位に再構成していることが分かる。「木曾殿の首実検のさま」（四）と宗盛への所望（二二）とでは、前者が実盛の死後、木曾の御前、後者が実盛の生前、宗盛の御前と、それぞれ異なる場面であるのを、『平家物語』では両方を知る語り手が第三者の視点で実盛に距離を置いて語り、前者においては手塚・

木曾・樋口・【木曾】・樋口・【木曾】の順に、後者においては実盛・【宗盛】の順に、だれの言葉も省略せずに会話を進行させる。また、後シテの語りでは【木曾】と【宗盛】の言葉を省略し、アイの語りでは前述のように手塚と樋口の名前を消して、泥で汚れた顔が見分けにくいという別の要素を付け加えている。さらに、『平家物語』では首を洗わせた結果白髪が現れたことに、語り手も木曾の御前のだれも感慨を漏らさないところを、後シテの語りでは「上ゲ哥」(⑦)と「クセ」(⑩)の二度、実盛の武名へのこだわりを称賛し、武名を北国の巷に轟かせたつもりでいる。『平家物語』の語り手が不朽の武名も屍が越路の末の塵となつては空しいと述べるのとは対照的に、その否定的な評言を引用から切り捨てた後シテは、自身の物語が朱買臣伝と並び不朽の武名をとどめることを訴えている。しかし、二百年後の北国の巷には、朱買臣を知らないアイがその代表なら、後シテが望むとおりには語り継がれていない。つまり、アイの語りは「後場で物語られるのとはほ同様」(『大系』)でないからこそ、後シテはアイの語りと異なる自分本位の物語を再現したいと言える。むしろアイの語りの行き届かない点が、後シテの出現を促す機能を担うと考えられるであろう。

五 〈実盛〉のアイの語りは実盛の誇りと悲しみを思わない

次に「10シテの物語の続きⅡ戦死の模様」の内容は、現代語訳に近い形で要約すると、次のようになる。

「ロンギ」(実盛の) 妄執は木曾と組み討つつもりが手塚に隔てられた無念に由来する。木曾方の兵が続々と名乗りを上げるなか、手塚の太郎光盛が進み出た。手塚の郎等は主人を討たすまいと間に馬を駆け入れて、(実盛と) 馬を並べて汲むところを、(実盛は)「きさま日本一の勇者と組む気か」と言つて、郎等を鞍の前輪に押し付け、首を掻き切つて捨ててしまった。

「中ノリ地」その後、手塚が実盛の左側に回つて、鎧の下の草摺を畳み上げ、二回刀で刺すところを、二人で組んで馬の間にどんと落ちたが、老武者の悲しさは、戦に体力を消耗し、風に縮んだ枯れ木が折れるように力も尽きて、手塚の下になつたところを、別の郎等が助力してとうとう首を掻き落とされた。

この実盛「最期の様子」(三三)は、覚一本『平家物語』の「実盛」では、

「ア」実盛は味方が皆落ち行くなか、ただ一騎引き返しては応戦していた。「イ」「存ずる旨」があり、赤地の錦の直垂に萌黄緘の鎧を着て鋏形を打つた甲の緒を締め、金作りの太刀を佩き、切り斑の矢を負い、滋籐の弓を持つて、連銭葦毛の馬に黄覆輪の鞍を置いて乗っていた。「ウ」木曾方の手塚はよい敵と目を付けて、ただ一騎残つた実盛を殊勝なと褒め、名乗りを促す。逆に実盛に名前を問われ、手塚を名乗るが、実盛は「存ずる旨」があり、名乗らないと答える。「エ」二人が馬を並べるところへ、手塚の郎等が遅れて来て、主人を打たせまいと間に入り、実盛と組む。実盛は「きさま日本一の勇者と組む気か」と言っ

て、郎等を鞍の前輪に押し付け、首を掻き切つて捨ててしまつた。「オ」手塚は実盛の左側に回り、鎧の草摺を引き上げて二回刀を刺し、実盛が弱るところを組んで馬から落ちた。実盛は心は勇むが戦に疲れ、その上老武者とあつて手塚の下になつた。手塚は遅ればせに来た別の郎等に実盛の首を取らせた。

両者を比べると、『平家物語』の「ア」は、後シテの語りでは木曾方の兵が続々と名乗りを上げるといふ表現に換えられている。実盛の目は味方の後ろ姿を追わず、押し寄せる敵兵の名乗りを耳を傾ける。「木曾と組まん」という意志が、実盛を前に向かわせる。『平家物語』の実盛は手塚と自分を「たがひによい敵ぞ」と認め、手塚ごときがと見下しはしないが、「日本一の剛の者」を自称するからには、大將軍の戦装束に釣り合う相手を得たい、それでこそ故郷に錦を飾ることになると、後シテの語る実盛は野心を膨らませる。しかし、敵兵をなぎ倒して木曾を探す「修羅の道」（修羅道に掛けて言うとも読める）は「手塚め」に隔てられ、理想の最期には到達しなかつた。後シテはそれを「無念」としつつ、精一杯、大きな目標に挑んだ姿を再現する。

大將軍の戦装束を詳細に描写する『平家物語』の「イ」は、後シテによる戦闘場面の語りでは割愛されている。代わりに後シテの登場場面で、幽霊が「夜の錦の直垂に、萌葱匂ひの鎧着て、金作りの太刀刀」を佩いていると説明される（8「上ゲ哥」）。後シテ自身がその出立で出現し、すでに見る者の目を驚かせている。再び戦闘場面に説明を複写しては、散漫な印象を与えかねない。それよりも急

の段にふさわしく、「修羅の道」を疾走する姿を描く必要がある。手塚が名乗りを促し、実盛が名乗らない、『平家物語』の「ウ」は、これも後シテは手塚が木曾にした報告の中に含めていて（前掲9「語り」）、あるいはワキが前シテに名乗りを促す場面（4「問答」）に転用済みであるため、忙しく破滅に向かう急の段に今更繰り返さない。実盛が名乗らない理由、「存ずる旨」とは、名乗つては正体二年齢を知られ、白髪を染めたかゝいなくなる、という思いである。これより早く『平家物語』の「イ」では、語り手が「存ずる旨」に言及している。こちらは実盛が大將軍の戦装束を着る理由を意味する。語り手による説明は後段（「錦の直垂をきたりける事は」以下）に配置されるが、実盛が宗盛に所望した理由は、朱買臣由来の「事に倣うという以上には説明されない。

樋口は実盛の首を見て錦の直垂を見ていない。木曾も御前の人々も、実盛が錦の直垂を着ていたという手塚の報告を聞きはしても、首の鬢鬚が黒いことを目前の関心事としている。錦の直垂を着る理由、実盛の「存ずる旨」は、宗盛との会話を知る語り手の立場でないと説明できない。その説明を、後シテの語りでも踏襲しつつ、宗盛が着用を許可したとするとどめる『平家物語』とは異なり、錦の直垂の実物を直接下賜したと読める表現にしている。恐らく宗盛に実物を下賜された時、実盛の心中には単に故郷に錦を飾るだけでなく、宗盛に代わつて平家を代表する意志が生まれ、それを後シテは「私ならぬ望み」と言うのである。そして錦の直垂を着て戦場に臨むからには、敵の大將木曾義仲と組み討たねばならない。

その企みは完遂しなかったが、実盛が名を北国の巷に上げたと言えるのは、白髪を黒く染め、戦装束を華麗にして、自分を飾ったためではなく、平家方の大将の姿で討ち死にし、意地と覚悟を印象づけたことによる。しかし、実盛はそのつもりでいるのに、『平家物語』の語りでは、実盛の意地に涙をこぼすのは樋口一人であり、木曾と組み討つ覚悟を知る者はいない。後シテが心の底に濁りを残す原因は、実盛の最期を語る者、聞く者に真実が伝わらないという思いに見いだされる。後シテは樋口に限らず木曾の御前にいる皆が実盛の意地に感涙を流し、平家を代表して木曾と組み討つ覚悟を初めて自ら明らかにする。枯木が折れるように力尽きた感覚を思い出して、老武者の限界を悲しんでいる。実盛が手塚に組み伏せられたのは二刀刺された重手による。戦にし疲れていた上、老武者であったから、心は勇猛でも組み伏せられた『平家物語』前掲「才」の傍線部)。後シテの語りでは心を奮い立たせる余力もなく、それを老武者の悲しさとして思い返している。

一方、アイの語りでは、後シテの語りの10段に相当する部分としては、わずかに「馬に乗り疾走するさまは諸人の目を驚かせたが、老武者ゆえにくたびれて、敏捷な敵に首を掻き落とされた」(前節における私意による要約)とあるのみで、手塚の郎等を手もなく切り捨てた「剛の者」の面影や、もちろん木曾と組む企みも、力尽きる感覚も伝えていない。アイの語りは実盛の誇りと悲しみを想像できていないと言える。老武者という言葉自体は、アイの語りでは、老武者ゆえに若く華やかに身拵えをした、老武者ゆえに髪が白いのを黒

く染めた、老武者ゆえに戦の途中でくたびれた、と三回使用している。アイの語りは、白髪を染めた意地こそ木曾方に褒められたと承知するが、錦の直垂を着ることを華やかな身拵えとしか言わず、また戦に疲れたところを、手塚ではなく何者かに首を掻かれたとしている。実盛はだれかに首を掻かれた、その首の白髪は黒く染められていた、という間違えようのない一部の事実から、自分の想像の範囲で要約するのがアイの語りであり、そうであるからこそ後シテが出現し、『平家物語』の語りも含めて、「語られる私(実盛)」とは異なる「私(実盛)の真実」を訴えるものと考えられる。

おわりに

このように「私(忠度・実盛)」の死後二十年、二百年の現在において、合戦の当事者でも目撃者でもないアイの理解は浅く、シテを語りながらシテの心情に寄り添うことがない。それは源平双方から情報を集めている『平家物語』にしても同じであり、シテからすれば覚めた語り方に聞こえるのはやむを得ない。そして本人の幽霊である後シテの語り、第三者の語りに異議を唱え、自分本位の語りに誘導するのも自然なことである。にもかかわらず、私たちは後シテが『平家物語』の本文のままに語り、アイは先行して同じ内容を語ると思い込んできたのではないか。また、後シテの語りとアイの語りの相違を、補足説明として納得してきたのではないか。(忠度)〈実盛〉の作者(世阿弥)は、『平家物語』に描かれた人物像の本質

を理解し、本人ならこう語るといふ深く熱い語り方を、能作りの根幹に据えていると見られる。その時アイの語りは、第三者ならこう語るといふ分際をわきまえている。アイが後シテに先行して「ほぼ同様に物語る」とする通説は改める必要がある。

注

(1) 新編日本古典文学全集『謡曲集②』(小学館、一九九七年五月)も「後の場の内容のほとんどをアイがここで語ってしまふという構成は、あらずじを前提として、後の場を受容するよう観客に求めているといえるだろう」という見方を示している。

(2) 日本古典文学大系『平家物語』下の頭注には「…えびらに一首の歌が結びつけてあったのには、敵も味方もその風流さに泣いた」とされるが、六弥太の名乗りに箴の歌のことは含まれていない。箴の歌のことを聞かないでいても、人々は忠度が武芸にも歌道にも達者であったと知っていたから、大將軍の死を惜しんだと見るべきであらう。

(3) 『源平盛衰記』卷第三十三「落行く人々の歌附忠度淀より帰り俊成に謁する事」は淀の河尻から引き返したとする。

(4) 永積安明「修羅能と平家の物語―世阿弥の「忠度」をめぐる―」(『観世』第三七卷第八号、一九七〇年八月)、加美宏「作品研究「忠度」―「平家物語」とのかかわりについて―」(『観世』第四三卷第三号、一九七六年三月)など。

(5) 櫻井陽子「忠度辞世の和歌「行き暮れて」再考―平家物語の本

文の再検討から―」(『国語と国文学』第八三卷第一二号、二〇〇六年一二月)の指摘による。なお、山木ユリ「忠度」・「実盛」の構造的特色―その構想力と構想観について―(『日本文学』第二三卷第一一号、一九七四年一月)は、後シテは「死後二十年という間の妄執から離脱することが出来た」とし、松井陽介「忠度上花」擁護論―シテ像再考の試み―(『金沢大学国語国文』第二六号、二〇〇一年三月)は、死後二十数年、シテは「自らの本質が忘れ去られる淋しさ」を抱えているとする。

(6) (5)の櫻井論文を引用。
(7) 『源平盛衰記』では忠度の方から早く首を討てと催促したことにする。

(8) 横道萬里雄「能本の戯曲性」(『能劇の研究』岩波書店、一九八六年)は仕方話をするシテ一人に焦点を結ぶ手法を一焦点主義と呼び、日本古典文学全集『謡曲集一』(小学館、一九七三年五月)は「役者が、忠度・六弥太それぞれの立場になって仕方話をしているのだとみればよい」、前掲『能楽論 狂言』は「仕方話の趣向」は「能が「語り物」的性格を色濃く持っていることの証拠」とする。

(9) 原文「あな無慚やな」。芭蕉が『おくのほそ道』で詠んだ句の「無慚やな甲の下のきりぎりす」はこれによる。

〔附記〕本研究は野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」二〇一七―二〇一九年度共同研究「間狂言資料集成の作成とアイ語りを視点とする夢幻能の再検討」並びにJSPS科研費17K02410の助成を受けた研究成果の一部です。